

魏志「東夷伝」における原初の 北東アジア諸民族に関する論攷

豊田 有恒

1. 「魏志」概要
2. 烏丸伝
3. 鮮卑伝
4. 東夷伝

1. 「魏志」概要

陳寿が著わした「三国志」は、我が国でも有名である。かれは、滅亡した蜀の官人であったが、宦官の黄皓に疎まれて、出世には縁遠かった。かれが三十一歳のとき、蜀の国は滅んで、魏に移ったものの、その魏も司馬懿によって篡奪され、新たに晋が興った。ようやく文才が認められて、「三国志」の編纂に着手するのは、寿が四十四歳になったときであった。「三国志」は、小説として有名な「三国志演義」の元となった歴史書だが、魏、呉、蜀の三国の歴史を、それぞれのパートに分けて記述したものである。「魏書」三十卷、「呉書」十五卷、「蜀書」二十卷という構成になっているが、一般には、「魏志」、「呉志」、「蜀志」と通称されている。

まず、この「魏志」の構成を見てみよう。魏は、天下を統一した晋の前身となった王朝であり、始祖の曹操についてなど、多くのページ数を割いているのは当然だが、別伝として周辺民族に関する記述もある。中国歴代王朝にとって、西域——つまり、シルクロード方面とは常に交渉があり、重要性から見て、記述の分量も多いのだが、北東アジアに関しては、それ以前の「漢書」、そして編纂の年代から見ると三国志に遅れる「後漢書」なども、それほど重要性を認めていない。この「魏志」になって、初めて北東アジアが視野に入ってくるのである。

事実、陳寿は、「東夷伝」の前書きで、こう断っている。「漢氏に及び、張騫〔ちょうけん〕を遣わし、西域に使いす。河源を窮め、諸国を経歴し、ついに都護を置き、もって之を総領す。しかるのち西域のこと、具〔つぶさ〕に存す。故に史官は詳載するを得。魏興りて、西域ことごとくは至るあたわずといえども、その大国、龜茲〔クチャ〕、于闐〔ホータン〕、康居〔キルギス〕、烏孫〔ウソン〕、疎勒〔カシュガル〕、月氏、鄯善、車師の属、

朝貢を奉ぜざる歳なし¹⁾。ほぼ漢氏の故事の如し」とある。漢代の張騫の中央アジア遠征によって、河川の源流なども調査するようになり、西域都護府を設置し、中国王朝が本格的に西域経営に乗り出したため、事情が判るようになった。西域——シルクロードの国々が、すべて来たわけではないにしても、ほとんどの国々が朝貢にやってくるようになり、以前の漢王朝の時代のようになった、というのである。これに対して、「東夷」の諸国、諸民族については、「車軌の及ぶところにあらず」あるいは「その遐遠なること、かくのごとし」さらに「その国列、同異を撰次し、もって前史の未だ備わざるを接げり」と記述しているくらいである。車が入ったこともない僻遠の地として退けられ、漢代には詳しくは知られていなかったゆえに、それぞれの国の別、異同等を順序を定めて記述し、これまでの歴史の足りない点を補いたいとする、陳寿の決意のほどが判ろうというものである。

陳寿は、問題の「東夷伝」にとりかかる前に、西域から東夷に至るステップとして、二つの民族に関して東夷とは別に記述している。「烏丸〔うがん〕伝」と「鮮卑〔せんび〕伝」である。烏丸も鮮卑も、紀元前後に、中国の興安嶺一帯に住んでいた騎馬遊牧民族で、しばしば漢王朝と関わりを持っていた。

2. 烏丸伝

烏丸は、もともとモンゴル高原にいた民族で、モンゴル系と考えられているが、トルコ系との雑種とも言われている。漢代に中国を悩ませた匈奴〔きょうど〕との関わりで論じられることが多いが、別種であろう。

「勇健能理の者を選び、侵犯者と決闘させ、大人²⁾と為す。邑落にそれぞれ小帥³⁾あり。世襲にあらず。数百千の邑落、おのずから一部を為す」とあり、かれら烏丸の風俗、制度などを解説している。

それによれば、文字はないが、木に刻み目をつけて誓いをたてると、あえて違反する者がいなかったとか、婚姻はいわゆる略奪婚によっていたとか、さまざまな習慣が、克明に記録されている。

烏丸は、西暦二百七年に、魏の曹操によって滅ぼされている。

かれら烏丸は、騎馬遊牧民族だったのである。

3. 鮮卑伝

ついで、鮮卑に関する別伝が設けられている。鮮卑は、同じく匈奴の衰退の時期にモンゴル高原に現れる。モンゴル系と言われるのだが、どうやらトルコ系の民族であつたらしい。

この鮮卑民族は、漢代のはじめに、匈奴の冒頓単于〔ぼくとつぜんう〕に敗れて、遼東方面に逃れていたが、後漢の代になると、しばしば匈奴と連合して漢土を侵すようになり、光武帝のころは、北辺には平穏な歳がないとまで言われたほどである。

鮮卑の勢力が強大になるのは、西暦二世紀に檀石槐〔だんせきかい〕が登場してからで

ある。この檀石槐には、民俗学的に興味ぶかい出生伝説がある。

父親の投鹿侯〔とうろくこう〕は、匈奴軍に従って三年のあいだ、戦いに明け暮れしていた。そのあいだに、妻は檀石槐を生んだというのである。久しぶりに帰宅した投鹿侯は、訝って生まれた子を殺そうとした。すると、妻は、ある日、歩いていると雷鳴を聞いたので、天を仰ぐと雹が口に入った、その雹を飲み込むと妊娠して、十カ月のちには、この子が生まれた——と答えたのである。なにかの奇跡にちがいないから、この子を育ててやりたいと、妻は夫に頼みこんだ。

この説話パターンは、のちの扶餘〔プロ〕、高句麗〔コグリョ〕の始祖伝説の東明王〔トンミョンワン〕朱蒙〔チュモン〕の誕生説話にも通じる。天の気を感じて妊娠するというモチーフは、感生説話と呼ばれるもので、イエスキリストの処女懐胎の神話にも通じる点が興味ぶかい。

それはともかく、檀石槐は、長じるにおよんで、勇健で智略衆にすぐれていた。すでに十四歳にして、母の実家の牛、羊を盗んだ一味を討伐して、おおいに武名を上げたという。法令を施行し、理非曲直を矯したため、とうとう推されて大人の地位についた。現在の東北地区のほとんどの部族長が、檀石槐のもとに参じたため、強大な軍勢力が整った。檀石槐は、しばしば南方の漢王朝の領土を侵し、東は扶餘、西は烏孫⁴⁾を討って、東西一万二千余里、南北七千余里の版図を手にするに至った。

檀石槐の勢力の拡大は、漢王朝にとっても、頭痛の種になった。漢は、桓帝(146~167)のとき、使匈奴中郎将の張奐に鮮卑征討を命じたものの、まったく効果を上げなかった。そこで漢朝は、檀石槐を懐柔する方針に転じて、使者を送り印綬を贈り、王号を授けようとしたのだが、檀石槐から拒否されて、失敗に終わったのである。

漢王朝が、北東アジア一帯に猛威をふるう檀石槐の勢力を押さえることができなかつたため、幽州、并州では、鮮卑の略奪が横行して、周辺諸郡でも被害に遭わない場所がないほどであったと記録されている。だが、鮮卑の覇権も一時的なものに終わった。檀石槐は、全盛期にあつて、四十五歳にして、西暦183年ころ死亡したらしい。その子には、父の勢力を維持するだけの器量はなく、鮮卑およびそれに従っていた諸部族は分裂し、北東アジアの民族は、またもや混沌とした時代を迎えるのである。

魏志東夷伝は、烏丸伝、鮮卑伝について、北東アジアの諸民族について、記録することになる。

4. 東夷伝

「東夷伝」に扱われている民族は、合計七つであり、最後に位置しているのが、我々日本人の先祖と思われる倭人である⁵⁾。

(1) 扶餘〔プロ〕

まず冒頭に扶餘〔プロ〕という民族が紹介されている。以下、略字で夫余とする。「夫

余は、長城の北、玄菟〔げんと〕郡⁶⁾を去ること千里に在り、南は高句麗と、東は邑婁〔ゆうろう〕と、西は鮮卑と接す」という地理的な位置の説明から始まる。この夫余族は、戸数八万、東夷〔とうい〕のうちでは、もっとも平坦な領土に住んでいて、五穀を生じるが、五果を産しないとある。現在の中国の東北地区を領土としていた民族であるから、五穀の生産には向いているが、果物の生産には適していないという記述になっている。性質は強勇で、謹厚〔きんこう〕だとしている。謹厚は、謹みぶかく、人情に厚いという意味である。

国には君主がある。みな六畜〔りくちく〕の名を官名としている。馬加〔まか〕、牛加〔ぎゅうか〕、猪加〔ちよか〕、狗加〔くか〕、犬使などという名乗りをしている。こうした名乗りは、おそらくトーテミズムと関わりがあるであろう。

また、刑罰に関する記述では、殺人は死刑、家人を没収して奴婢にするなど、極刑が行なわれているとする。風俗では、兄が死亡した場合、弟が兄嫁を妻とする点が、匈奴と共通していると指摘している。

夫余は、もと玄菟郡に所属していたが、公孫度〔こうそんたく〕⁷⁾が、海東に勢力をふるうようになり、その支配下に置かれるようになった。度は、夫余王の尉仇台〔いきゅうだい〕に娘を嫁わせて、鮮卑、句麗などを牽制させようとしたとある。正始〔せいし〕年間(240～248)、魏の母丘儉〔かんきゅうけん〕は、句麗を討って、玄菟大守を派遣して、夫余に至った。公孫氏の滅亡が238年であるから、その二年後ということになる。以後、夫余も中国王朝の支配下に入ったのである。

夫余には、妙な記述もある。その国は殷富〔いんぷ〕とあり、夫餘庫というものがあり、数代の宝物が伝世されていたという。「濊王の印」というものがあり、「国には故城ありて濊城と名づく」とある。濊〔わい〕は、のちに登場するが、濊貊〔わいはく〕と呼ばれるように、貊族とも関係があったらしい。夫余王は、自ら亡人と称していたという。つまり、亡命者だということである。

そして、この条の最後に、東明王の始祖伝説が紹介されている。昔、高麗国というところで、王の侍女が妊娠した。王は、不貞を働いたということで、殺そうとする。すると、侍女は、鶏卵のような気が、体に入ってきたため、身ごもったという。生まれた子を、王は溷〔こん〕——厠に捨ててしまう。すると、豚がやってきて、その赤ん坊を蘇生させてしまう⁸⁾。

前述した鮮卑の檀石槐の誕生伝説に類似している。おそらく、こうした始祖伝説が、北東アジア一帯に流布していたのであろう。

こんどは馬小屋へ捨てたが、馬が息を吹きこんで、またもや蘇生させてしまう。

そこで、王は、我が子ながら天の子だと思い、やむなく侍女に育てさせることにするのだが、この子は、弓矢が巧かった。王は、しだいに脅威に感じはじめる。そこで、殺そうとするが、その子は脱出する。施掩水〔しえんすい〕という大河のところに来たとき、王

の追手に追いつかれてしまう。弓矢を叩くと、水中から魚鼈〔ぎょべつ〕⁹⁾が浮かんできて橋となり、対岸へ渡してくれる。そして夫余の地に至り、やがて東明王となったという。

この夫余族は、のちの百済〔ペクチェ〕の建国に関わりがあるとされる。百済の温祚〔オンジョ〕王朝は、夫余を姓とし、その王都も夫余と称している。現在、大韓民国の忠清南道〔チュンチョンナムド〕の夫余は、かつての百済の王都として、かの国の修学旅行のメッカとなっている。

かつて中国の東北地区にいた夫余族が南下して、朝鮮半島の南西部に王朝を開いたことが、おおよそ想像できるのだが、依拠する文献によって異同があり、いちがいに説明できない。

「三国史記」によれば、百済の始祖の温祚王の父は、鄒牟〔すうむ〕あるいは朱蒙〔しゅもう〕という。北夫余から逃れてきて、その土地の夫余族の王に非凡な才能を見込まれ、その王女を嫁わされ即位し、沸流〔プリュ〕、温祚〔オンジョ〕という二王子が生まれるのだが、かつて朱蒙が、北夫余にいたころ先妻の生ませた太子が現れたため、二人の王子は身の危険を察して、国を脱出して十人の臣下を連れて、南へ向かった。

二人の王子に従う者が少なくなかった。やがて、漢山に至り、負兎嶽に登り、都すべき土地を探そうとし、兄の沸流は海辺に留まるのだが、十人の臣下は諫めて言った。都を定めるべきだと進言するのだが、沸流は承知せずに、彌鄒忽〔ミスコル〕という場所へ行ってしまった。そこで、弟の温祚が河南の慰礼城に即位して、百済を建国した。はじめ、十人の臣下に補佐されたので、十濟〔シプチェ〕と号したが、のちに百済〔ペクチェ〕という国号になった。前漢の成帝の鴻嘉三年（西暦前十七年）という。

この記録が、歴史そのものでないことは論を待たない。神話、伝説の域を出ない。日本の歴史が、その紀元をはるかに古くまで遡らせようとする作為を働かせているのと同様に、朝鮮の史書にも同様の作為が見いだせるのである。施掩水、負兎嶽、彌鄒忽などの地名を現在の地名に比定するのは難しいが、朝鮮半島を縦断する夫余族の南下を示す記録ではあるだろう。

ただ、慰礼城が、現在の大韓民国の首都ソウルの漢江〔ハンガン〕の南の地域を指していることは、ほぼ異論のないところである。オリンピック公園などがある江南地区に、初期百済の土城遺跡が保存されている。これに関して、稲葉岩吉氏は、こう説明される。「太康六年（西紀285年）鮮卑の慕容氏に襲撃された扶餘の残黨は、長白山の東沃沮に逃げこんだというから、それが轉出して帯方に入ったものが、即ち百済であろう」¹⁰⁾

帯方とは、後漢王朝末期に楽浪〔らくろう〕郡から分割された一帯である。

父親の東明王も、故国を去らねばならない事情にあったが、その子の二人の王子も、さらに故国を追われることになる。百済の建国が紀元前に遡るなどということはありませんが、かつての扶餘族に連なる始祖伝説が伝えられ、そのことが、古代日本に渡来した多くの百済系の人々にも受け継がれていたことは、注目に値するにちがいない。のちの平安時

代に、桓武天皇のころ、津の連〔むらじ〕真道〔まみち〕という人の上表文に、「都慕王〔つぼおう〕の末裔」という表現が見られる。この都慕王こそ、扶餘、高句麗、百濟の始祖伝説に登場する東明王なのである。百濟系の渡来人である高野の新笠を母に持つ桓武天皇も、また、この北東アジア一帯に流布されている伝説に連なる一人である。

(2)高句麗〔コグリョ〕

「東夷伝」では、次に高句麗〔コグリョ〕の条が位置している。

高句麗は、遼東の東千里にあり、南は朝鮮、濊貊〔わいはく〕と、東は沃沮〔よくそ〕と、北は夫余と接す——と、地理的な位置の説明から始まる。丸都〔がんと〕(遼寧省輯安)¹¹⁾に都したという。

かれら東夷〔とうい〕の日常の言語は、夫余の別種であることを示している。言語、諸事は、夫余と同じ場合が多いのだが、性質や衣服は異なっている点も少なくない。その風俗に立ち入るほどの紙数もないが、いくつかを紹介する。十月には天を祭るという。ちなみに大韓民国の開天節〔ケチョンチョル〕が、十月三日である。結婚は女の家に通う、いわゆる妻問婚〔つまどいこん〕で、女の家背後に婿屋を設ける点も面白い。日本でいう若衆小屋という風習とも通じる。葬式には、金銀財幣を副葬し、手厚く葬るという。

前漢、後漢のあいだに、篡奪した王莽〔おうもう〕によって、三日天下のような新〔しん〕という王朝が建てられるが、この時期に高句麗征討が行なわれている。高句麗を討伐した王莽は、その国名を下句麗〔かくり〕と改名させた。中華王朝にとって、帰順しない蛮夷の国に、高いなどという良い意味の漢字を用いたくなかった。そこで、高句麗あらため下句麗と命名したのである。

後漢の光武帝の八年(西暦32年)、高句麗王は、朝貢している。しかし、紀元二世紀に入ると、高句麗は再び漢とことを構えるようになる。しばしば遼東を攻略し、勢力を振るうようになるが、その一方で遼東には公孫氏が自立して、燕王を自称するようになり、高句麗と争うようになる。

三国時代になると、こうした北辺の状態を、江南の呉が見逃すはずがなかった。呉の孫権は、公孫氏に対して、以下の詔命を発している。

「朕、不徳をもって元命を肇受〔ちょうじゅ〕し、夙夜〔しゅくや〕競競として、仮寝に違〔いとま〕あらず。ここをもって眷眷〔けんけん〕、俊傑〔しゅんけつ〕を勤求し、将〔ま〕さにともに戮力〔りくりよく〕して、海内を共定せんとす。いま使持節督幽州領青州牧遼東大守燕王¹²⁾あり。久しく賊虜〔ぞくりょ〕に脅せられ、一方に隔在す。すなわち国に心すといえども、その路縁なし。いま天命により遠く二使を遣わす。款誠頭露し、章表懇懃なり。朕のこれを得たる、何の喜びか之にしかず」

呉の孫権は、大喜びして、遼東の公孫淵の使者に、勅書を与えて、同盟をうながした。つまり、江南の呉と、遼東の公孫氏とで、南北から魏を挟み打ちにしようという戦略だったのである。勅書のなかの賊虜とは、魏の曹操を指している。魏によって邪魔されている

ので、国を思う情熱があっても、一地方に押しこめられていたため、遠い呉まで使節を派遣することができなかったが、このたび使者がやってきたことは、まことに喜ばしいということである。

呉は、公孫淵の求めに応じて、将兵一万を乗せた大船団を派遣し、遼東と共同作戦を実行しようとする。しかし、これほど、露骨に行なっては、遼東の動きが魏に知られないわけがない。魏は、遼東の公孫氏を譴責してくる。しだいに公孫淵の態度が、ぐらついてくる。とうとう、公孫淵は、派遣されてきた呉の正使の張彌〔ちょうび〕、許晏〔きょあん〕の首を斬って、魏にさしだす始末であった。

残る呉の使節も、いつ処刑されるか判らない状態で、軟禁された場所からとうとう脱出を試み、遼東の領土から逃げだそうとする。行くこと六、七百里にして足を痛めた一人を置きざりにし、やがてかれら呉人は、高句麗の領土に達する。

ひよんなきっかけから、今度は、呉と高句麗が、同盟を結んで、魏に対抗することになった。結局は、この同盟も失敗に終わるのだが、日本でいう邪馬台国の時代に、北東アジアにおいて、こうしたパワーゲームが行なわれていた事実には、着目すべきであろう。

公孫氏は、景初二年（238年）、魏の司馬懿によって、討伐され滅亡する¹³⁾。邪馬台国の女王卑弥呼の遣使が、魏の都の洛陽に至るのは、この年としてあるが、これには、公孫氏が障害になっているから、その翌年——つまり景初三年（239年）の誤記とする説が有力である。また、高句麗も、その後、正始五年（244年）、幽州刺使の毋丘儉〔かんきゅうけん〕によって敗られ、一時的に歴史の表舞台から姿を消すのである。

北東アジア世界に流布されている東明王朱蒙の伝説は、高句麗とも関わりがあるが、ここでは再述しない。

(3)東沃沮〔ひがしよくそ〕

「東夷伝」では、高句麗の条のあとには、東沃沮〔ひがしよくそ〕という民族に関する記述がある。

東沃沮は、高句麗の蓋馬大山の東にあり、大海に沿って居住している——と、「東夷伝」の記述の定石のように、地理的な説明から書きはじめている。その地形は東北が狭く、西南が長く、千里にわたっている。北は、邑婁〔ゆうろう〕、夫余と、南は濊貊〔わいはく〕と接している。戸数は五千、大きな君主はいない。それぞれの部族長がいる。言語は句麗と大同小異である。

漢王朝の初めに、衛満¹⁴⁾という燕〔えん〕の亡命者が、朝鮮を支配した。このとき、沃沮は、その支配下にあった。漢は、この衛氏朝鮮を討って、四郡を設置したが、沃沮城をもって玄菟城に当てた。その後、別な夷狄に攻められて、場所を移したりしたのだが、後漢になってから、有名無実化していた「東夷」への支配を中止したので、それぞれの民族が小さな独立国のようにになり、夷狄同士で互いに攻撃しあったりするようになった。なかでも、沃沮は、勢力が小さかったので、高句麗に臣属することになった。

魏の母丘儉が、高句麗を討った際、高句麗王の位宮〔いきゅう〕が、沃沮へ逃げこんだので、これを討つため大軍を進め、斬首した敵は三千以上にのぼった。位宮王は、さらに北沃沮へ逃げた。北沃沮は、八百余里はなれているが、風俗習慣に違いはなく、邑婁〔ゆうろう〕と接している。母丘儉の部将の王なにかしは、位宮王を追撃して、沃沮の東の境界を窮め、土地の老人に訊〔き〕いた。

海東に人は住んでいないのかと問いかけると、老人は説明してくれた——とある。奇妙な物語なのだが、あるいは、日本海を挟んだ日本列島に関する記録が、歪曲されたかたちで伝わったものかもしれない。その話は、現代語訳すれば以下のごとくである。

「この国の人々が、かつて舟に乗り魚を捕って、風に吹かれて数十日ののち、東のほうへ向かい、ひとつの島にたどり着いた。上陸してみたが、言葉が通じない。七月には、幼い女の子を海に沈める習慣がある。その先にまた国があるが、海のまんなかで、女ばかりで男がいない。さらに、老人は、こう言った。ひとりの普通の男に出会ったが、海のなかから浮かんできた容姿は中国人のようだが、衣服の袖は三丈もあった。また、難破船があったのだが、波に漂う舟が海岸の近くにあり、一人が乗っていた。項〔うなじ〕に顔がついていて、生け捕りにして話しかけてみたものの、言葉が通じないまま、食べ物を口にしないで死んでしまった。これらの地域は、沃沮の東の海の向こうにある」

いかにも不思議な物語である。北沃沮とは、現在の清津〔チョンジン〕あるいは羅津〔ナジン〕から豆満江〔トゥマンガン〕を越えて、ロシアのプリモルスキー地方（中国でいう沿海州）あたりを指していると思われる。そこから東を望むということは、日本海を挟んだ日本列島を意味しているのであろう。

(4) 邑婁〔ゆうろう〕

邑婁〔ゆうろう〕の条は、「東夷伝」のうち、もっとも短いパートである。

夫余の東北千余里にあって大海に沿っていて、南は北沃沮と接しているが、その北の果ては知られていない。言語は、夫余とも高句麗とも異なる。五穀、牛馬、麻布などを産出する。大きな族長はいない。それぞれの集落ごとに族長がいて、山林のあいだに住んでいて穴居している。土地は夫余よりはるかに寒く、豚を飼っているので、防寒のため豚の脂を体に塗っている。夏は、素っ裸で僅かに腰のあたりを覆うだけの服装である。住民は不潔で、家の中心に便所を設けている。

漢代から夫余に属していたが、黄初年間（220～226）に反乱を起こした。夫余は何度か討伐したのだが、人口は少ないものの、険しい山によって抵抗し、しかも毒矢を使うので、ついに屈伏させられなかった。

東夷たちは、たいていは、まな板や高杯〔たかつき〕を使うのだが、この邑婁〔ゆうろう〕だけは別であり、もっとも綱紀に乏しい民族である。

こうした記述から見て、この民族が、狩猟採集経済を営んでいたらしいことまでは、想像がつくのだが、あまり文明的でない描写になっている。ロシア人が、太平洋岸に達する

千八百年も昔のことである。現在の少数民族——ギリヤーク、オロッコなどに比定することは難しい。なかには、絶滅したプロトモンゴロイドの一種とする説もある。

(5)濊〔わい〕

濊の条は、明らかに、朝鮮半島に居住していたことを示す記述になっている。北は高句麗・沃沮と、南は辰韓〔しんかん〕（後出）と、接していて、東は大海に窮まっている。つまり、今日の江原道〔カンウォンド〕、咸鏡道〔ハムギョンド〕あたりを根拠としていたことが判る。

箕子朝鮮¹⁴⁾に言及したあと、箕子の子孫が王を僭称していたと記録している。中国歴代王朝にとって、冊封〔さくほう〕体制というものがあり、周辺の異民族は蛮夷と見なされるから、勝手に王号を名乗ることは許されないのである。

ただ、秦帝国の成立によって、燕、斉、趙など、かつての戦国七雄の国家から、多くの亡命者が北東アジアへ流入したという指摘は、重要な意味を持っているにちがいない。漢の武帝の四郡の設置によって、胡漢〔こかん〕の別が稍〔しだい〕に生じたという記述も、意味深長である。中華文明では、華夷〔かい〕の別が、重んじられる。ここでは、胡漢という表現を用いているが、これは、一般に誤解されているごとく人種による差別ではない。中華文明を理解しているかどうかによる差別なのである。蛮夷〔ばんい〕の出身であっても、中華文明を理解するものは華であり、逆に中国人であっても蛮夷〔ばんい〕の風習に染まってしまったものは夷でしかない。胡漢の別とは、箕子の子孫、戦国時代に移住した人々などを含めて、漢民族の子孫であろうと、北東アジアの民族の風習に染まってしまったものは、中華の民と認めないというわけである。

ただ、こうした前書きがあるわりには、濊族に関しては、好意的な記述になっている。人性は愿慤〔げんこく〕（すなお）、嗜欲すくなく、廉恥あり——としてから、高句麗に依存しないが、言語、風俗は高句麗とたいてい同じだとしている。

その俗は、山川を重んじ、山川にはおのおの部分ありて、みだりに相渉〔あいがかわ〕り入るを得ず——とある。今風にいえば、自然保護に徹していたということであろう。山川には入会権〔いりあいけん〕のような掟があったようである。

同姓は婚せず——とある。同姓不婚〔トンソンプホン〕は、今日でも韓国では憲法によって保証されている。生物学的には、一種の近親婚の禁忌（incest taboo）としての意味がある。

天を信仰したり、虎を神として祭ったり、部族間の侵犯事件の処理には奴隷や牛馬のやりとりで解決したり、などの風習に関する記述がある。

また、果下馬という記述は、古代史の論争に花を添えている。果物の樹木の下枝にも届かない馬というのは、西域の巨大な馬匹——安息〔あんそく〕（古代パルチア）の汗血馬のような軍馬とは、まったく対局に位置する馬種である。騎馬民族説¹⁵⁾の争点であるブルジェワルスキー馬という小型馬の先祖と考えられる有力な証拠にあたる。今日の大韓民国

の濟州島の濟州ウマ〔チェジュマル〕や、対馬の対州馬〔たいしゅうば〕の先祖と考えられるポニー系統の小型馬を指していることになるからである。

この濊族は、二世紀なかばには、中国に朝貢するようになったというが、許された称号は、不耐濊〔ふたわい〕王というものであった。以前から楽浪郡とは交渉があったが、高句麗征討の後、服属するようになったらしい。それにしても、不耐濊という名は、漢民族が手を焼いたから命名したものであろう。

(6)韓〔かん〕

「東夷伝」の最後から二番目に、韓の条がくる。

今日の大韓民国の版図そのままの地理的な説明がある。ただし、当時の韓民族は、おおよそ三つのテリトリーに分かれていた。馬韓、辰韓、弁韓の三つの地域である。

「韓は、帯方〔たいほう〕の南にあり、東西は海をもって限りとし、南は倭と接す。方四千里とすべし。三種あり。一を馬韓といい、二を辰韓といい、三を弁韓という。辰韓なるものは、古〔いにしえ〕の辰国なり」

倭と接す——とあるのは、注目に値する。もし、倭人が日本列島に居住しているだけであるとすれば、玄界灘が介在しているから、韓と接しているという表現にはならない。朝鮮半島の南部にも倭人という民族が住んでいたのである⁹⁾。

そのあと、これら三韓の個別の説明に移り、まず馬韓から始める。養蚕を行なうとか、山海のあいだに散在して、城郭を持たないなどの説明があった後、五十余国の名を列挙している。

これら五十余国は、いわゆる村落共同体国家である¹⁰⁾。

大国は万余戸、小国は千余戸で、総じて十万余戸ある。辰王は、これらのなかの月支国〔げっしこく〕にいたという。また、それらの一国に伯齊〔はくせい〕国があり、これが後に統一をなし遂げて、百濟王朝になったとする説もあるが、百濟=夫余系という説とは矛盾するようにも思われる。

このあと、すでに原典が失われている「魏略」という文献からの引用として、馬韓地域とは離れて、現在の大韓民国の領土にあった三韓全体と、中国王朝との関わりにページをさいている。秦〔しん〕の時代から、箕子朝鮮、衛氏朝鮮などと、歴代王朝との抗争史を記録しているが、漢の出先機関である楽浪〔らくろう〕、帯方〔たいほう〕の二郡との交渉史に重点を置いている。かつて、箕子の子孫と称する準という男が、王を名乗ったときは、中国側では僭称——身の程を知らぬ名乗りとして、退けている。今度は、公孫氏の滅亡を契機として、諸韓国の部族長に邑君〔ゆうくん〕という印綬〔いんじゅ〕を授けている。

ちなみに、邪馬台国の女王卑弥呼は、魏から親魏倭王という王号を認められ、金印紫綬を授けられている。これら韓国の首長階層と比べると、破格の待遇を与えられているわけである。

そのあと、本題に戻り、馬韓について解説する。

「その俗は綱紀すくなし。国邑には主帥ありといえども、跪拜〔きはい〕の礼なし。居処は草屋、土室を作り、形は冢〔つか〕のごとし。その戸は上にあり、家をあげて共に中にあり、長幼男女の区別なし」

とある。どうやら、あまり文明的には描写されていない。そのあと、州胡〔しゅうこ〕について、説明している。記されている描写から見て、今日の済州島を指していることは間違いない。

このあと、辰韓に移る。馬韓の東という。今日の大韓民国〔テハンミングク〕の慶尚道〔キョンサンド〕の一带であることに異論はない。のちの時代に新羅に発展する地域である。昔から亡命者が、韓国に来ていたのだが、秦王朝の滅亡によって、多くの人々が中国から渡来した。こうした人々のため、馬韓の一部が割かれて、辰韓が成立したのだが、もともとは、秦王朝にちなんで、秦韓〔しんかん〕と呼ばれていたものを、現在の辰韓という漢字表記にしたのである。辰韓のついでのように、残る弁韓についても、説明している。辰韓が十二国、弁韓が十二国といい、個別に村落共同体国家¹⁶⁾の名を列記している。

風俗では、特に記すようなこともないが、注目すべき点がある。

「国は鉄を出す。韓、濊、倭は、みな従〔ほしいまま〕に、これを取る。諸々の市買は、みな鉄を用う。中国で錢を用うるがごとし」

朝鮮半島において、韓、濊、倭のあいだで、鉄の争奪戦が行なわれていたことが判る。しかも鉄は、中国の貨幣と同じように、通貨として使用されていた。壱岐の島の原の辻遺跡から、膨大な量の鉄挺〔てっぺい〕が出土しているのは、こうした事情の傍証にはなるであろう。

辰韓の条で、重要な記述がある。辰王という存在である。十二国が、この辰王のもとに属している。辰王には、馬韓の人を用いるが、辰王は自立して王になることはできない。この記述を、江上波夫氏は、朝鮮半島の南部にいた騎馬民族の頭領を指すものではないかと推測している。

そして、弁韓について、とってつけたような説明を加え、この条を終わっている。特記すべき点は、弁韓のうちの瀆盧国〔とくろこく〕が、倭と界を接しているという記録であろう。朝鮮半島にも倭人という民族が存在した証拠である。

(7)倭人

そして、「魏志東夷伝」の最後の条が、「倭人」となっている。言うまでもなく、われわれ日本人の先祖と関わりのある民族名である。ただし、倭という文字は倭〔わい〕という字とも関係があり、あまり良い意味ではない。

「倭人は帯方〔たいほう〕の東南の大海のなかにあり。山島によって国邑をなす。もと百余国、漢時に朝見する者あり。いま使訳の通うところ三十国。郡より倭にいたるには海岸に循〔したが〕いて水行し、韓国を経て……」

以下、倭人の国々へ行く順路を記録している。こうした書き方は、他の民族の条では見られない。百余国という記事は、漢代のことである。「楽浪海中に倭人あり、分かれて百余国をなす。歳時をもって来たりて朝見し」という「漢書」地理志・燕地条の記述に合致する。それら村落共同体国家¹⁶⁾が整理統合されて、三十国に減っているという事実も、やはり見逃せない。実際、このあと、それら邪馬台国に関連する三十国の名を、あれこれ列記している。

対馬、壱岐、末盧〔まつろ〕(松浦地方)、伊都〔いと〕(前原付近)、奴〔な〕(福岡市周辺)など、邪馬台国に至る途中の国々を紹介しているのだが、奴国より先の地名の比定に関しては、多くの学説があり、その結果、邪馬台国の所在については、現在の学界において、おおよそ九州説、畿内説に分かれ、論争が続いている。

陳寿自身が、日本へやってきたわけではないので、それまでの記録を整理して「魏志」を編纂する際に、記述に混乱が生じている。そのため、邪馬台国の位置を正確に同定することが不可能なのである。

ただ、たとえば対馬の描写にしても、「土地は山險しく、深林多くして、道路は禽鹿〔きんろく〕の径〔こみち〕のごとし」とある点など、今日の状況としても、対馬の地形を過不足なく記録していると言えよう。また、一支(壱岐)に関する記録でも、「やや田地ありて、田を耕すになお足らざるがごとし。また南北に市羅〔してき〕¹⁷⁾す」とあるのも、おおよそ正確な描写のように思われる。

最近のナショナリズムのせい、中国人がいい加減なこと書いた——とする説もあるが、不正確な部分はあるにしても、陳寿が前書きにも宣言しているように、これまでの記録で不備な点を補いたいという編集方針は、信じるに値するであろう。

いわゆる倭人伝、「魏志東夷伝倭人の条」を信用できる傍証が、いまひとつある。それは、各民族に関する記述の分量の差と質の問題である。これまでの論者が、見過ごしてきた点なのだが、「東夷伝」のなかで、もっとも分量の多いのは、倭人条なのである。常識的に考えれば、中華王朝と接触の度合いの多いはずの韓、夫余、高句麗のほうが、重要性もあり、詳しく記録されていて当然であろうが、そうではなく倭人のほうが重要視されている。

中華書局標点本¹⁸⁾によれば、倭人条が六十一行、三韓を合計した韓条が五十行、高句麗が四十四行、夫余が二十二行などであるという。

また、描写の質に関しても、倭人条が、他の民族に関するそれを、はるかに上回っている。中心となる国へ行く道中の記録、また、各国の長官、次官の名称、経済状態、外交関係など、他の民族の条では、ほとんど記録されていないが、倭人に関しては詳しく描写されている。

また、女王卑弥呼に関してだが、「宮室、楼観、城柵を厳かに儲け」などと、敬意を払っているかのような表現になっている。もちろん、多くの論者が説くように、邪馬台国の邪、

卑弥呼の卑など、あまり良い意味でない漢字いわゆる卑字〔ひじ〕を用いていることはまちがいないが、これは中華思想の本家の中国人の表現では、むしろ当たり前のことである。

「租賦〔そふ〕を収める邸閣あり、交易の有無は大倭をもって、これを監せしむ」というくだりも、邪馬台国の行政組織が、かなり整備されていたことを示している。大倭については諸説あるが、ここでは踏みこまないでおく。また、文書を伝送するという記事は、驚くべき事実であろう。文書といえば、漢文しか考えられないから、当時の倭人が漢字をマスターしていたという事実を示す文献なのである。

倭人は長生きで、七、八十年も生きていくという記事、また、治安がよくて、訴訟ごとが少くないという記事など、今日の日本にも共通する特徴と言えないこともない。

だが、これらの記事より、はるかに抜きん出た重要性を持つ記述は、女王卑弥呼の魏への遣使の記録であろう。もちろん、夫余、高句麗、韓など、中国の周辺民族も、歴代中華王朝に遣使していたのであるが、それらの記事は、邪馬台国の場合ほど大々的に扱われてはいない。卑弥呼からの貢ぎ物は、布二匹、奴隸十人という見すばらしいものでしかなかった。これに対して、魏は、膨大な品々を下賜している。有名な銅鏡百枚をはじめ、絹、毛織物、錦、キルティングなど繊維製品だけでも、途方もない量にのぼる。

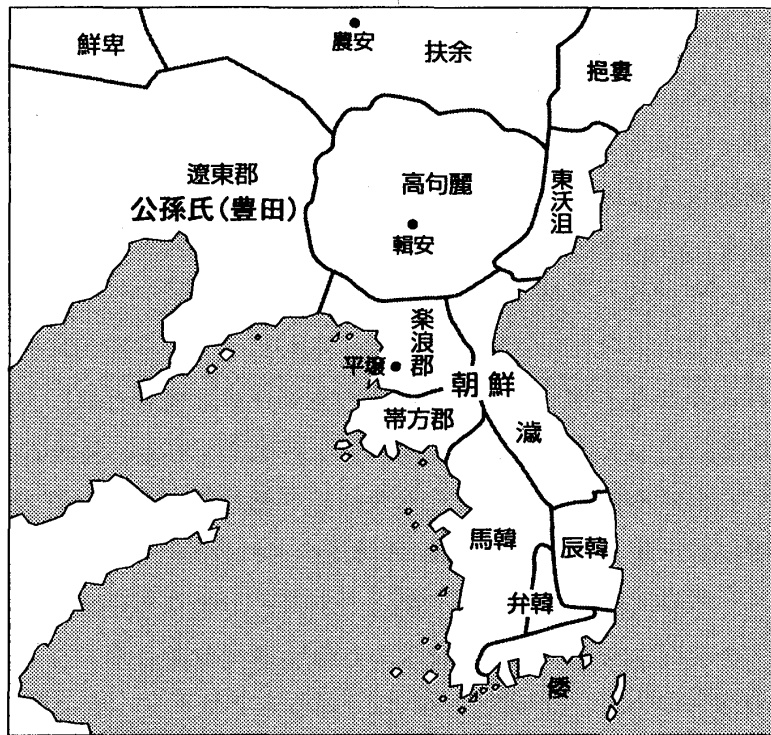
女王卑弥呼を親魏倭王に叙し、金印紫綬を与えたばかりでなく、さらに使節の難升米〔なしめ〕を率善中郎将に、牛利〔ごり〕を率善校尉に任じたうえで、銀印青綬を与えたのである。「東夷伝」に列記されている他の民族の首長階層でさえも、金印はおろか銅印さえも下賜されていないのに、倭人だけは例外的な破格の処遇になっている。

もちろん、自民族中心主義 (Ethnocentrism) のような解釈は、厳に慎まなければならないが、「東夷伝」の記録を比較しながら読んでいくと、倭人の条のみ破格の待遇になっていることが、はっきりするのである。

私見を加えるなら、当時の北東アジア全体を視野に入れたパワーバランスが作用していたのであろう。前述したごとく、江南の呉と、公孫氏、高句麗など、魏を挟撃する同盟の動きが存在した。こうした動きが失敗に終わったことは前述したとおりなのであるが、こうした南北を軸とした同盟関係に対抗するため、魏は、倭人との東西同盟に過大な期待を寄せたのではないだろうか？

邪馬台国は、今やマスコミの話題として、大いにもてはやされている。だが、大和だ、九州だと、結論の押し売りのような動きに出る以前の問題として、原点に立ち戻って、北東アジア的な視点で、真摯な研究を行なうことが、今やもっとも必要になっているのである。

『三国志』「東夷伝」による諸民族の地理的位置



(注) 井上秀雄著『古代朝鮮』(NHKブックス、1980年刊)に依拠して作成

注

- 1) 魏志文帝紀に「延康元年(220年)濊貊、夫余単于〔ぜんう〕、焉耆〔えんぎ〕、于眞〔うてん〕王、みなおのおの使いを遣わして奉獻す。黄初三年(222年)二月、鄯善、龜茲〔きじ〕、于闐〔うてん〕王、みなおのおの使いを遣わし奉獻す」とある。
- 2) 部族連合の指導者の意。
- 3) 個々の部族の族長を指す。
- 4) 烏孫。天山山脈の北、イリ河の流域にいた騎馬遊牧民族。トルコ系と言われるが、コーカソイドの一派と考えられている。柔然族に敗れ、パミール高原の彼方へ逃れたとされるが、それきり歴史から消えた。
- 5) 倭人に関しては、日本列島に住んでいた民族の謂であることは確かであるが、かならずしも、そればかりを指すわけではなく、中国本土、朝鮮半島にも倭人という民族がいたという記録がある。鳥越憲三郎氏は、倭族という名称を提唱している。
- 6) 玄菟郡。紀元前108年、前漢の武帝が設置した四郡の一。真番、臨屯、楽浪の三郡とともに、漢帝国の北東アジア経営の拠点であった。だが、その場所に関しては各説があり、確定されているのは、現在の北朝鮮の平壤〔ピョンヤン〕にあった楽浪郡衙だけにすぎない。
- 7) 公孫度。三国志の時代、遼東にあった地方政権の初代。公孫度、公孫康、公孫淵と続き、魏の曹操の討伐を受けて、滅亡する。日本史にアナロジーを求めれば、奥州平泉の藤原三代のような存在である。

- 8) 沖縄はじめ、東南アジアには、人糞で豚を飼育する習慣があった。
- 9) 魚鼈〔ぎょべつ〕。サカナとスッポン。魚などが、並んで橋となり、人を河や海の対岸へ渡すというモチーフは、日本の因幡の白兔の物語ばかりでなく、インドネシアでも見受けられる。
- 10) 稲葉岩吉氏、「朝鮮史」(平凡社)
- 11) 韓安〔しゅうあん〕。有名な広開土王〔クワンゲトワン〕碑がある場所として知られる。なお同碑に関しては、畏友李進熙〔イジンヒ〕氏の「広開土王碑の研究」(吉川弘文館)が、日本史学会にセンセーションを巻き起こした。
- 12) 使持節督幽州領青州牧遼東太守燕王。公孫淵が、呉の孫権から許された称号。
- 13) 司馬懿〔しばい〕。魏の大臣。字〔あざな〕を仲達。三国志では、蜀の名将諸葛孔明〔しょかつこうめい〕と対戦し、有名な「死せる孔明、生ける仲達を走らす」という故事の語源になり、三国志を小説化した「三国志演義」では、特に狂言回しのように扱われているが、実際には有能な名将であり、その孫の司馬炎(武帝)は、西晋王朝の始祖となり、祖父の司馬懿に宣帝という諡号〔しごう〕(おくりな)を追諡〔ついし〕している。
- 14) 衛満。衛氏朝鮮の始祖となる燕からの亡命者。なお、それ以前の殷王朝の箕子〔きし〕が、暴君の紂王の圧政を逃れて、朝鮮に王朝を開いたとする箕子朝鮮は、伝説の域を出ないものと考えられている。その意味で、衛氏朝鮮は、最初の朝鮮半島の統一者と解釈される。
- 15) 騎馬民族征服説。昭和二十三年、江上波夫氏によって提唱された学説。ツングース系の騎馬民族が、朝鮮半島を経由して、古代日本に侵入して、王朝を建てたとする説。現在も賛否の論争が継続している。
- 16) 村落共同体国家 (Bauerngemeinwesen)。Max Weberによる。
- 17) 市糶〔してき〕。米の買い入れのこと。
- 18) 中華書局標点本。百衲本、清の武英殿本、金陵活字本、江南書局刻本の四書を底本として校注や段落、句読点などを設けたもの。これまでの紹興本など、古い写本を底本として、異同を論じてあるという。

キーワード 『三国志』 シルクロード 東明王伝説 感生説話 百濟 桓武天皇
プリモルスキー地域 プルジェワルスキー馬 辰王 卑弥呼

(Aritsune TOYOTA)